

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

科学研究費助成事業 研究成果報告書



平成 30 年 8 月 18 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(A)（一般）

研究期間：2013～2017

課題番号：25243002

研究課題名（和文）越境と変容—グローバル化時代におけるスラヴ・ユーラシア研究の超域的枠組みを求めて

研究課題名（英文）Border-crossing and Transfiguration: In Search of a New Paradigm of Slavic Eurasian Studies in the Age of Globalization

研究代表者

沼野 充義 (Numano, Mitsuyoshi)

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授

研究者番号：40180690

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 21,200,000 円

研究成果の概要（和文）：ソ連解体後のスラヴ・ユーラシアの変容と越境の様々な様相に焦点を合わせた包括的な研究である。グローバル化時代の世界情勢を考慮に入れ、新たな研究の枠組みの構築を目指した。代表者および19名の分担者の専門は、地域的にはロシア、ウクライナ・コーカサス・中央アジア、中・東欧から、東アジアや南北アメリカに及び、分野も文学・言語・芸術・思想・宗教・歴史から政治・経済・国際関係に至るまで人文社会科学全体にわたる。このようなグループによる超域的・学際的アプローチを通じて、国際学会の組織に積極的にに関わり、日本のスラヴ・ユーラシア研究の国際的発信力を高めるとともに、この分野における国際交流の活性化に努めた。

研究成果の概要（英文）： We have focused our research project on various aspects of “transfiguration” and “border-crossing” in Slavic Eurasian world. It is an attempt at constructing a new comprehensive framework of this discipline in the age of globalization after the collapse of the Soviet Union. Our group consists of 20 members whose specialized regions include Russia, Ukraine, the Caucasus, Central Asia, Central and Eastern Europe, East Asia, and North and South America and their disciplines cover entire fields of the humanities and social sciences, ranging from literature, language, arts, philosophy, religion, history, politics, economy to international relations. Through such transregional and interdisciplinary approaches we have striven to organize international academic conferences, enhance our ability to disseminate abroad the academic achievements of Japanese Slavic and Eurasian studies, and activate international academic exchange.

研究分野：ロシア・スラヴ文化・文学、比較文学、世界文学

キーワード：スラヴ地域研究 ユーラシア地域研究 中東欧地域研究 日露関係 ロシアの文学と歴史 ウクライナ
問題 越境文学 世界文学

1. 研究開始当初の背景

(1) 東欧革命・ソ連解体後、従来「ソ連東欧研究」と呼ばれていた研究の枠組みが崩れ、新たな研究のパラダイムが模索されつつあった。端的な例は、アメリカの巨大学会 AAASS (American Association for the Advancement of Slavic Studies) の改名である。1948 年に旧社会主義圏の学術的な研究の発展を主眼として設立されたこの学会は、2010 年には ASEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) と名称を変更し、中央アジアを含むユーラシア全体を研究対象とすることを明確化した。

(2) もう一つの大きな国際学会組織としては、ICCEES (International Council for Central and East European Studies) が挙げられる。これは 1974 年に創設された、世界各国の旧ソ連・東欧地域研究学会の連絡組織であり、5 年に一度、参加者 1000 人以上の規模の世界大会を開催してきたが、近年、この傘下でアジア地域学会も頻繁に開催され、2015 年 8 月には千葉県の幕張で世界大会が開催されることになった。アジアで史上初めて開催されるこの世界大会に向けて、本研究計画の代表者および分担研究者の多くが組織委員として鋭意準備を進めていた(代表者沼野および分担研究者下斗米はこの世界大会の共同組織委員長として大会の準備を始めていた)。

(3) 一方、日本国内ではこの地域の総合的研究に一貫して取り組んできた代表的な研究機関として、北海道大学スラブ研究センターがあり、旧来のソ連東欧研究から、スラヴ・ユーラシア研究へと積極的な方向転換と研究の展開を行った。その成果は同センター監修『講座スラヴ・ユーラシア学』全 3 巻(講談社、2008 年)にまとめられている。また同センターは視野をロシアから、さらにインド、中国にも広げた新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較」を遂行中であった。本研究の分担研究者、松里はスラブ研究センターに所属する中核的研究者であり、代表者沼野および分担者の大部分も同センターの学術活動に積極的に関与してきた。

2. 研究の目的

(1) 東欧革命・ソ連解体の結果、これらの地域が急速な変容を遂げるとともに、従来、「ソ連東欧研究」と呼ばれていた地政学的な枠組みが崩れ、新たな分野横断的・超域的な研究の枠組みが求められている。この研究は、ロシアを中心にユーラシアの東西に広がる地域を「スラヴ・ユーラシア地域」として捉え、その新たな研究のパラダイムをグローバル化時代の世界との関係も視野に入れつつ探ることを目的とする。その際、「変容」「越境」「超域」が研究の主たるキーワードとなる。またそれに加えて、日本におけるスラヴ・ユ

ーラシア研究の国際的発信力を高め、この分野における国際交流を活性化することも、本研究の重要な目的となる。

(2) 本研究は、様々な地域および分野を専門とする研究者たちの共同作業によって、東欧革命・ソ連解体後のスラヴ・ユーラシア世界に生じた変容のメカニズムを総合的・分野横断的に把握し、旧来のソ連東欧研究に代わるスラヴ・ユーラシア研究の新たなパラダイムの構築を目指すものである。個別の地域・分野(歴史、政治・経済、文学、宗教など)での研究は各分担研究者が進めながら、全体としては、以下の点を目指す。

歴史・文学研究と政治・経済研究の相互乗り入れによる有機的展開。スラヴ・ユーラシア地域研究における人文系と社会系の垣根は日本においてはアメリカやロシアの場合よりも伝統的に低く、相互乗り入れのための土台がすでに準備されている。それを活用し、人文社会系を統合し、分野横断的な共同研究を実現する。

西洋研究と東洋研究の両方の蓄積を統合してスラヴ・ユーラシア研究に取り組むことによって、欧米世界を相対化して見るだけでなく、中国・インド・日本といったアジア世界をグローバルな比較の枠組みの中に位置づけることも可能とする。

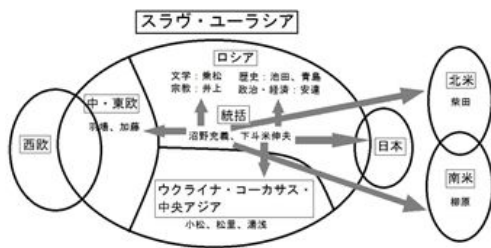
欧米偏向を脱し、日本も視野に入れた形でのユーラシア研究モデルの構築。特に文学の分野では、従来の世界文学は実質的には欧米文学の世界への拡張であったという反省を踏まえ、新たな観点からの世界文学モデルの構想に取り組む。

スラヴ・ユーラシア地域における様々な民族・文化の「越境」的現象を総合的に把握する。「越境」はこれまで異文化接触などの文化的側面、亡命などの政治的側面、そして移民・民族離散などの社会的側面など、様々な観点からのアプローチが個別に試みられてきたが、本研究はそれらを総合して地域の歴史を考えるための新たな枠組みを提示しようとする試みである。

3. 研究の方法

(1) 分担研究者を地域・分野別に「ロシア」「ウクライナ・コーカサス・中央アジア」「中・東欧」「南北アメリカ」に分ける。研究代表者・分担者は、各年度の主要課題に沿って、それぞれの専門地域・ディシプリンでの具体的な研究を進める。さらに、その成果を柱としながら、常に緊密な連携をとることによって、個別の研究をスラヴ・ユーラシア世界全体の文脈で検討する。

(2) 数多くの専門分野を異にする分担者が参加するため、地域・分野間の緊密な連絡と交流をはかる。そのために、沼野と下斗米が全体の統括の役割を果たす。基本的な組織を図解すると、以下のようになる。



(3) 国内での文献的調査だけでなく、海外での現地調査、国際学会での報告も積極的に行い、また海外から研究者を招聘し、研究交流を活性化する。

(4) 一年に一回程度、スラヴ・ユーラシア地域の超域的な研究集会を開催し、各自の研究成果を分担者どうしが常に共有するようにする。2015年に幕張で行われる ICCEES 世界大会を特に重要な成果中間発表の場と位置づける。

4. 研究成果

(1) 初年度の平成 25 年は、主要な課題を「ソ連東欧からスラヴ・ユーラシアへ——歴史的展望」と定め、各研究分担者が、それぞれの専門領域において、1990 年代から現代における旧ソ連東欧圏の歴史の変遷を振り返り、歴史学・文学・宗教・政治・経済など、様々な分野でどのような変化があったのか、本質的に変化したものとそうでないものを今の時点から見分けながら整理する作業を行った。これは 5 年間の研究の前提を確認し、共有するための基礎作業であり、各分担研究者は着実に調査を進め、論文や学会報告などの形で成果を発表した。

外国人研究者などの参加を得て、学会、セミナー、特別講演などのイベントも随時開催した。とりわけ重要な活動として位置づけられるのは、8 月 9 日・10 日に大阪経済法科大学で行われた第 5 回スラヴ・ユーラシア研究・東アジア・コンファレンス「ユーラシアについての 1913-2013 年——偉大な実験か、失われた世紀か？」への積極的な参加および組織協力である。この学会の主催者の一つである JCREEE (日本ロシア東欧研究協議会) の代表幹事を務める沼野が基調報告を行い、ICCEES 国際委員などの海外研究者の参加旅費の一部を負担し、スラヴ・ユーラシア研究に関する国際的な研究の枠組みを再検討するとともに、2015 年に迫っている ICCEES 世界大会に向けて、研究グループとして積極的に取り組むことを確認した。

(2) 平成 26 年度は、主要課題を「変容と越境——グローバル化時代のスラヴ・ユーラシア研究の方法論」と設定して、スラヴ・ユーラシア地域における国家や言語・文化の境界を越えての移動やそこから生ずる接触・衝突・疎外・新たなアイデンティティの創出、異郷における民族意識の強化や他民族との同化といった問題を特に重点的に取り上げた。口

シア、ウクライナ、旧ユーゴスラヴィア、ポーランド、中央アジアなどの地域を専門とする研究分担者が、政治、国際関係、歴史、文学などの領域にわたってそれぞれ文献分析と現地調査を行い個別に研究を進め、学会報告や論文・著書の形で成果を挙げた。

代表者沼野は高等経済学院（モスクワ）、ワルシャワ大学、マナス大学（ビシケク）、翻訳者会議（モスクワ）などに招かれてスラヴ文学と日本の交流に関する報告を行い、現地の研究者と情報交換・討論を行った他、リヴィウ（ウクライナ）で文化事情調査を行った。また沼野および分担者下斗米は 6 月にソウルで行われた第 6 回東アジアスラヴ・ユーラシア研究学会に参加し、中国および韓国の研究者と交流し、東アジアにおける研究ネットワークの構築に努めた。

国内でも 8 月には ICCEES 学術委員会の東大での開催に協力し、その機会に来日した ICCEES 執行委員である歴史家のトマス・ブレマーおよびピーター・ウォルドロンを招いて東大で講演会を行った（世話役は研究分担者の池田嘉郎）。その他、トマス・ラーフセン（トロント大学）、ナターシャ・ゲルケ（ポーランド移民作家）、ウラジーミル・パペルヌイ（ハイファ大学）、マリナ・カトニッチ＝バカルシッチ（サラエヴォ大学）などを迎えて東大でセミナー・討論を行った。

(3) 平成 27 年度は主要課題を「東アジアが発信するスラヴ・ユーラシア研究」とし、研究を各地域・ディシプリンにおいて継続的に発展させながらも、ここまで 2 年間の研究成果を統合して国際学界に問うため、8 月 3 日～8 日に千葉市幕張（幕張メッセおよび神田外語大学）で開催された第 9 回国際中欧・東欧研究連絡協議会（ICCEES）世界大会の準備・運営の中心を担った。代表者沼野と分担者の大多数がこの大会の組織委員会を構成し、世界 49 か国からの 1310 人にのぼる研究者が集まる学会の運営を担った。この学会で代表者および分担者の多くは、国際政治・経済・歴史・文学・文化・芸術などの分野でそれぞれパネルを組織するとともに、自ら研究成果報告も行い、日本のスラヴ・ユーラシア研究の成果を国際的に発信した。

これらの学会活動を通じて得られた主な成果としては、ウクライナ危機を、現代の国際政治の観点からだけでなく、文化・歴史のパースペクティヴから総合的にとらえたこと、東アジアにおけるスラヴ・ユーラシア研究のネットワークの構築と協働態勢の強化、日本と東アジアの国際関係を、政治・経済だけでなく、文化交流の面も含めて検討したこと、スラヴ文学と日本文学の関係・相互の影響を、世界文学のプロセスの成果について互いに常時共有する態勢を作ったこと、などが挙げられる。

(4) 平成 28 年度は、主要な課題を「対立と

和解の超域的展開」として研究活動を進めた。スラヴ・ユーラシア世界では冷戦後、ソ連という強固な体制が動揺・解体したことによりそれまで潜在的であった民族間対立が表面化した。ソ連解体から20年以上を経過した時点で、この地域はウクライナ問題、シリア内戦、東アジアの不安定、移民・難民問題などの以前にもまして困難な問題に直面するようになった。こういった事態を踏まえ、日本の視点を生かして、歴史・文化・宗教などの側面を重視しながらこの地域の総合的研究の新たな形を探った。そのために、中央アジア・コーカサスを含む旧ソ連圏の演劇の専門家、中東欧の文学・芸術の専門家を新たに研究分担者に加え、スラヴ・ユーラシア世界の特に芸術・表象文化の観点からの研究体制を強化した。

そして、分担者間の専門を超えた対話・連携をより緊密にし、国際的に著名な海外からの研究者との討論・意見交換を通じて、スラヴ・ユーラシア地域研究の現代的なパラダイムについての包括的なビジョンの創出を試みた。本研究プロジェクトの趣旨に沿った講演、セミナー、研究会などに参加した海外からのゲストには、ツヴィカ・セルペル（イスラエル）、エヴゲニー・ヴォドラスキン（ロシア）、スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ（ペラルーシ、2015年度ノーベル文学賞受賞者）、ミリアム・トリン（イスラエル）、アレクサンドル・メシチェリャコフ（ロシア）、デリア・ウングレアヌ（ルーマニア）がいる。

また2017年2月27日～3月1日には東京大学人文社会系研究科の主催により「新・日本学」連続講義のためにデイヴィッド・ダムロッシュ教授をハーバード大学から招聘し、世界文学に関する特別セミナーが行われたが、その企画運営面で全面的に協力した。

(5) 最終年度の平成29年度は主要テーマを「スラヴ・ユーラシア研究の＜超域性＞—地域とディシプリンを超えて」と定め、この研究計画のキーワードであった超域性について、「地域を超える」という意味と、「ディシプリンを超える」という意味の両方の観点からの研究を遂行し、5年間にわたる研究の総まとめを行った。ただし研究はもちろんこれで完結するわけではなく、将来のさらなる研究の発展につながる見通しが得るべく努力した。

そのためにこれまで研究が手薄であった境界領域の研究に力を入れ、ジョージア（グルジア）およびロシアのサハリンの研究者たちと共同で国際シンポジウムを開催した（「日本とジョージアの対話——学術文化交流の歴史と未来」於トビリシ国立大学、使用言語英語、および「チェーホフとサハリン島の文学」於東京大学、使用言語ロシア語）。これらの地域との人文社会系での本格的な共同学術シンポジウムは前例がなく、ディシプリンの新たな可能性を切り開くものとな

った。

(6) 成果の全体を総括すれば、5年間にわたって代表者と19人にのぼる分担研究者はそれぞれが専門とする地域と分野における研究の深化に務めながら、個別地域をスラヴ・ユーラシア研究の広い文脈に置き見直す方向で相互に連携し、分野横断的な刺激を互いに与えながら、研究を進めた。その結果、日露関係を政治・経済・文化交流など多角的な観点から分野横断的に検討してユーラシア世界の中に位置づけ、また文学や思想、映画・舞踊・演劇など様々なジャンルにおける日本とスラヴ・ユーラシア地域との有機的な関係について探る研究成果を挙げた。

こういった成果を統合した形で世に問い、スラヴ・ユーラシア研究の最前線の状況を示し、啓蒙的な役割を果たすことも重要な課題であり、本研究グループは2015年の最大の行事であったICEES幕張世界大会が成功裡に終了したことを踏まえ、その成果を発展させて全5巻の論文集をまとめる計画を進め、1～2年後には東京大学出版会から刊行する内諾を得ている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計100件）

沼野充義、ヤコブソンとナボコフの確執をめぐって—象、イーゴリ、スパイ
SLAVISTIKA、査読無、32巻、2017、41-60、DOI 無

Masumi Kameda, Flight and Joyous Life: American and Soviet Propaganda in the Interwar Period, 査読無、5巻、2018、167-182、DOI 無

Keiko Mitani, Uz-prefixation and Dependent Future in Croatian Rasprave, 査読有、43巻、2017、379-397、DOI 無

Kimitaka Matsuzato, The Donbass War: Outbreak and deadlock, Demokratizatsiya, 査読有、25-2巻、2017、175-200、DOI 無

Kyohei Norimatsu, The Reality of Falsehood: Leo Tolstoy's The Cossacks and the Romantic Fashion of the Caucasus in Russian Literature, Neohelicon: Acta comparationis litterarum universarum, 査読無、43-2巻、2016、403-416、DOI 無

下斗米伸夫、労働組合論争・再論—古儀式派とソビエト体制の角度から、法学志林、査読無、4巻、2016、1-52、DOI 無

Kimitaka Matsuzato, Domestic Politics in Crimea, 2009-2015, Demokratizatsiya, 査読有、24-2巻、2016、225-256、DOI 無

Mitsuyoshi Numano, K izucheniiu "istorii russkoi literatury" v Iaponii, れにくさ、査読無、7巻、2017、160-167、DOI 無

柳原孝敦、(論文集分担執筆)「第8章 国民文学と地方文学」、立石博高編著『概説 スペイン文化史 18世紀から現代まで』(ミネルヴァ書房)、査読無、2015、182 - 205、DOI 無

青島陽子、ロシア帝国の「宗派工学」にみる帝国統治のパラダイム、『国史史は躍動する』(池田嘉郎編著)、刀水書房、査読無、2015、121 - 151、DOI 無

小松久男、トイとイスラーム：歴史と現在、ロシア・ユーラシアの経済と社会、査読有、999 巻、2015、2 - 17、DOI 無

湯浅剛、グローバル政治の焦点としてのウクライナ戦争—国家性・地域機構・地政学、広島平和研究、査読有、3 巻、2016、75 - 89、DOI 無

松里公孝、クリミアの内政と政変(2009 - 14)、現代思想、査読無、42-7 巻、2014、87 - 109、DOI 無

井上まどか、ユートピアがディストピアになるとき—ソルジェニーツィンのロシア論における悪の不在、清泉女子大学人文科学研究紀要、査読有、35 巻、2014、67 - 92、DOI 無

沼野充義、亡命詩人、娼婦たち、それともナボコフ—間違えたのは誰か? (『賜物』におけるある誤植をめぐって)、れにくさ、査読無、5-1 巻、2014、100 - 121、DOI 無

〔学会発表〕(計 9 6 件)

沼野充義、トランプ—プーチン時代のロシア東欧の文化事情、ロシア・東欧学会(招待講演)、2017

Mitsuyoshi Numano, Sakartvelo Dreaming': Reception of Georgian Images in Japan through Russian Literature, Dialogue between Georgia and Japan: Exploring the History and Future of Scientific and Cultural Exchange(国際学会)、2017

Yoko Aoshima, Change of Attitudes or Temporary Compromise? Imperial Educational Politics and the Peoples of the Western Borderlands around 1905, ASEES (国際学会)、2017

Yoshiro Ikeda, The Provisional and the East Within and Outside Russia the Asian Are of the Russian Revolution: Setting the East Ablaze?, Yale-NUS College, Singapore(招待講演、国際学会)、2017

Yuko Adachi, Developments in State-Owned Business under Putin, Annual Convention of the AEEES(国際学会)、2018

Atsushi Sakaniwa, Chaadaev i Tiutchev: Istoriia, sistema i kaos, Peter Chaadaev: Between the Love of Fatherland and the Love of Truth (国際学会)、2016、クラクフ(ポーランド)

Kyohei Norimatsu, From Space to Event: The Development of Yuri Lotman's Concept of translation, 21st World Congress of the

International Comparative literature Association(国際学会)、2016、ウィーン(オーストリア)

Kimitaka Matsuzato, The Donbass War: Outbreak and Deadlock, The 7th East Asian Conference on Slavic-Eurasian Studies(招待講演、国際学会)、2016、上海(中国)

Takeshi Yuasa, Russia, China and Japan's Role and Strategy in Central Asia, IFRI Seminar "Assessing the Role of Russia, from Europe to Asia: Japanese and European Perspectives" (国際学会)、2016、パリ(フランス)

Mitsuyoshi Numano, Pasternak in Japan: Reception and Translation, Poetry and Politics in the 20th Century: Boris Pasternak, His Family, and His Novel Doctor Zhivago (国際学会)、2015、スタンフォード大学(アメリカ合衆国)

Masumi Kameda, Soviet Cosmvision: First Live Broadcasts from Outer Space, ASEES 47th Annual Convention(国際学会)、2015、Philadelphia, USA

下斗米伸夫、ウクライナをめぐるロシア・エリートの認識(1992-2014)、ロシア・東欧学会、2014、岡山大学

柳原孝敦、劇場と祭のトポス—カルペンティエールの場合、日本ラテンアメリカ学会第35回大会、2014、関西外語大

加藤有子、ポーランド・ウクライナ国境地帯の文学・美術と境界—ユダヤ人の動きを軸に、ロシア・東欧学会、2013、津田塾大学

Mitsuyoshi Numano, The Role of Russian Literature in the Development of Modern Japanese Literature from the 1880s to the 1930s, Russia in East Asia: Imagination, Exchange, Travel, Translation, 2013, Columbia University

〔図書〕(計 5 2 件)

Kyohei Norimatsu 他, Brill, Policing Literary Theory (Calin-Andrei Mihailescu and Takayuki Yokota-Murakami, eds.), 2018, 218 (執筆担当 111-134)

Nana Gelashvili and Mitsuyoshi Numano (eds.), Department of Contemporary Literary Studies, Univ. of Tokyo, Dialogue between Georgia and Japan: Exploring the History and Future of Scientific and Cultural Exchange, 2018, 130

池田嘉朗、松里公孝 他(編)、岩波書店、世界戦争から革命へ(ロシア革命とソ連の世紀 1)、2017、320

Timur Dadaev and Hisao Komatsu (eds.), Palgrave Macmillan, Kazakhstan, Kyrgyzstan, and Uzbekistan: Life and Politics during the Soviet Era, 2017, 147

阿部賢一、水声社、カレル・タイゲープエジの探求者、2017、340

沼野充義、NHK出版、スタニスワフ・レ

ム ソラリス、2017、97
 下斗米伸夫、筑摩書房、神と革命—ロシア革命の知られざる真実、2017、382
 亀山郁夫、沼野充義（共著）、河出書房新社、ロシア革命100年の謎、2017、364
 Kimitaka Matsuzato (ed.), Rowman & Littlefield, Russia and Its Northeast Asian Neighbors: China, Japan, and Korea, 2017, 222
 池田嘉朗、岩波書店、ロシア革命—破局の8か月、2017、256
 沼野充義、講談社、チェーホフ—七分の絶望と三分の希望、2016、381
 三谷恵子、白水社、比較で読みとくスラヴ語のしくみ、2016、246
 奥彩子、西成彦、沼野充義（共編）、松籟社、東欧の想像力—現代東欧文学ガイド、2016、317
 植岡求美、沼野充義 他（共著）、Logos (Belgrade), Found in Translation: Transformation, Adaptation, and Cross-cultural Transfer, 2016, 224
 乗松亨平、講談社、ロシアあるいは対立の亡霊—「第二世界」のポストモダン、2015、259
 下斗米伸夫、五百旗頭真 他（共編著）、東京大学出版会、日ロ関係史—パラレル・ヒストリーの挑戦、2015、736
 池田嘉朗、草野佳矢子（共編著）、刀水書房、国史は躍動する—ヨーロッパとロシアの対話、2015、348
 安達祐子、名古屋大学出版会、現代ロシア経済—資源・国家・企業統治、2016、418
 小松久男、山川出版会、激動の中のイスラム—中央アジア近現代史、2014、124
 湯浅剛、明石書店、現代中央アジアの国際政治—ロシア・米欧・中国の介入と新独立国の自立、2015、336
 ①加藤有子（編著）、成文社、ブルーノ・シュルツの世界、2013、252
 ② Mitsuyoshi Numano, Joachim Kupper, David Damrosch 他, Akademie Verlag, 2013, 180 (執筆担当 147-166)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

沼野 充義 (NUMANO, Mitsuyoshi)
 東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
 研究者番号：40180690

(2) 研究分担者

三谷 恵子 (MITANI, Keiko)
 東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
 研究者番号：10229726

松里 公孝 (MATSUZATO, Kimitaka)
 東京大学・大学院法学政治学研究科・教授
 研究者番号：20240640

柳原 孝敦 (YANAGIHARA, Takaatsu)
 東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
 研究者番号：20287840

青島 陽子 (AOSHIMA, Yoko)
 神戸大学・国際文化学研究科・准教授
 研究者番号：20451388

小松 久男 (KOMATSU, Hisao)
 東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
 研究者番号：30138622

乗松 亨平 (NORIMATSU, Kyohei)
 東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
 研究者番号：40588711

植岡 求美 (TATEOKA, Kumi)
 東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授
 研究者番号：60324894

井上 まどか (INOUE, Madoka)
 清泉女子大学・文学部・准教授
 研究者番号：70468619

亀田 真澄 (KANEDA, Masumi)
 東京大学・大学院人文社会系研究科・助教
 研究者番号：70726679

下斗米 伸夫 (SHIMOTOMAI, Nobuo)
 法政大学・法学部・教授
 研究者番号：80112986

坂庭 淳史 (SAKANIWA, Atsushi)
 早稲田大学・文学学術院・教授
 研究者番号：80329044

池田 嘉郎 (IKEDA, Yoshiro)
 東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授
 研究者番号：80449420

湯浅 剛 (YUASA, Takeshi)
 広島市立大学・広島平和研究所・教授
 研究者番号：80758748

阿部 賢一 (ABE, Kenichi)
 東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授
 研究者番号：90376814

安達 祐子 (ADACHI, Yuko)
 上智大学・外国語学部・准教授
 研究者番号：90449083

加藤 有子 (KATO, Aiko)
 名古屋外国語大学・外国語学部・准教授
 研究者番号：90583170